

平成 21 年 5 月 18 日現在

研究種目： 基盤研究 (B)
 研究期間： 2005～2008
 課題番号： 17401025
 研究課題名 (和文) 都市化過程の考古学的研究
 —シリア北西部テル・エル・ケルク遺跡の発掘から—
 研究課題名 (英文) An Archaeological Studies on the Urbanization:
 Based on the Excavations at Tell el-Kerkh, Northwest Syria
 研究代表者
 常木 晃 (TSUNEKI AKIRA)
 筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・教授
 研究者番号： 70192648

研究成果の概要：シリア北西部のエル・ルージュ盆地に所在する巨大な新石器時代集落であるテル・エル・ケルク遺跡の発掘調査を実施し、その研究成果から、紀元前 8600 年～5800 年にかけての集落の形成、変遷、衰退過程を明らかにした。特に紀元前 6500 年ごろの集落の様相の解明に力を注ぎ、社会の複雑化が相当進行していたことや、社会の運営に儀礼活動が重要な役割を果たしていたことなどが判明した。また、居住域に隣接して墓地が発見され、当時の社会の葬送習慣や他界観などについての多くの情報をもたらした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	3,800,000	0	3,800,000
2006年度	3,600,000	0	3,600,000
2007年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
総計	13,000,000	1,680,000	14,680,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：都市化・西アジア・新石器時代・集落の発達・職業专业化・長距離交易・高度な工芸品・原都市

1. 研究開始当初の背景

1990年代半ばごろから、西アジアで進行中のいくつかの遺跡調査によって、新石器時代像が大きく見直されつつあった。ギョベクリ・テペなど先史時代の巨大宗教センターとも言える遺跡が発掘されたり、複雑な封泥システムの存在が証明されたサビ・アビヤッド遺跡が調査されたりしていたからである。こうした遺跡が集中しているのがユーフラテス川中流域～バリフ川上流域なのだが、同地域とは対照的にシリア北西部ではほとんどそのような遺跡も検出されておらず、調査もな

されてこなかった。しかしながら本研究の代表者らが1997年よりシリア政府文化財博物館総局と共同で調査研究を進めてきたエル・ルージュ盆地のテル・エル・ケルク遺跡の調査は、そのような状況を一変させることになった。新石器化が相当遅れたと考えられてきたシリア北西部で、紀元前8600年ごろまで遡る先土器新石器時代B期初頭の文化層が発見されたばかりでなく、同B期後半から土器新石器初頭にかけて、西アジアでも最大級の集落に発展していた可能性が示されたからである。したがって、同遺跡の調査研究を継続するこ

とは、西アジア新石器時代の研究にとって極めて重要な成果を提供できるものと確信できた。

2. 研究の目的

研究代表者らが調査を進めてきたシリア北西部のテル・エル・ケルク遺跡は、南北約 1 km、東西約 400m の広がりを持つ巨大なテル(人口遺丘)の複合体で、西アジア新石器時代で最大級の集落遺跡であるばかりでなく、1997 年からの 6 シーズンにわたる発掘調査の結果、先土器新石器時代 B 期初頭から土器新石器時代にかけての長期にわたる文化層が連続して発見され、特に紀元前 7500 年～6500 年ごろの先土器新石器時代 B 期末～土器新石器時代はじめにかけて、20ha に達するかという巨大な集落が営まれていたことが判明してきた。そしてそれは単に巨大なだけでなく、職業専門化や長距離交易の発達、それに高度な工芸品の製作といったような、複雑化した複合の様相を内包した、プロト都市といってよい社会を呈していたと考えられた。

本研究では、テル・エル・ケルク遺跡の発掘調査を継続し、集落の形成、変遷、衰退過程の全体像を明らかにしようと試みた。その研究調査成果は、なぜ先史時代に巨大な集落が成立していくのか、ひいては都市とは何かという西アジア史や人類史にとっての重要な課題を解明しうる基礎的な資料を提供するものと思われた。

3. 研究の方法

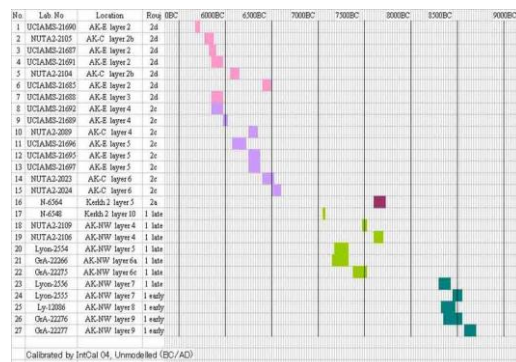
(1) 発掘調査： 本研究の調査期間であった 2005～2008 年、毎年夏季を中心に現地では約 2 カ月間にわたり、発掘調査を実施した。調査実施国はシリアアラブ共和国、地域はイドリブ県エル・ルージュ盆地、発掘対象遺跡は同盆地南部に所在するテル・エル・ケルク遺跡である。発掘調査は主として、テル複合体である同遺跡の最も北側のテル・アイン・エル・ケルク遺跡の中央区と東トレンチ、南側のテル・エル・ケルク 1 号丘南西部の 3 か所で実施した。

(2) 出土遺物の調査研究： 調査期間終了後、あるいは冬季、春季に、現地において出土遺物の整理、研究を実施した。本研究には、考古学、形質人類学、古植物学など様々な専門分野の研究者が携わった。

(3) 調査成果の研究と自然科学的調査： 発掘調査終了後、日本において、現地調査の成果の整理・研究と、持ち帰りが許可された炭化物の年代測定、人骨や動物骨、炭化種子などの自然科学的調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 北西シリアにおける新石器時代の文化編年の確定： 本研究では、都市の起源問題と深く関わるテル・エル・ケルク遺跡の発掘調査を継続し、この問題についてのあらたな基礎資料を広く研究者に提供することを直近の目標とし、大型集落の形成過程に焦点を当てて現地調査を実施してきた。この目的を達成するための最も基礎的な作業として、テル・エル・ケルク遺跡で新石器時代の編年を確立することが必要であった。そのために本研究期間の 4 年間にわたり、テル・アイン・エル・ケルク遺跡で東トレンチの発掘調査を行い、先土器新石器時代 B 期から、ケルク遺跡での新石器時代集落が終焉する土器新石器時代後葉までの考古学的な遺物編年の確立を目指した。さらに、これまで採取した炭化物の ^{14}C 年代測定の実施とその結果を検討し、考古編年と絶対年代の比定作業も行った。次の図は、ケルク遺跡の新石器時代文化編年とそれに対応する ^{14}C 年代測定結果を示したものである。



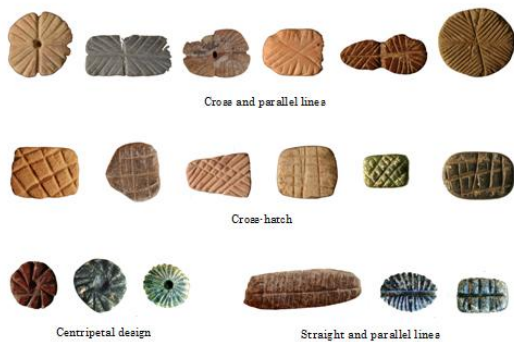
以上の結果、次のように編年と絶対年代をほぼ確定することができた。

ルージュ Ia 期 8600—8300BC
 ルージュ Ic 期 7500—7200BC
 ルージュ IIa,b 期 7200—6700BC
 ルージュ IIc 期 6700—6200BC
 ルージュ II d 期 6200—5800BC

(2) 新石器時代集落の複雑化の証明

1997～2002 年の調査で、特にルージュ Ic 期から IIc 期半ばまで、テル・エル・ケルクでは大型の集落が反映していたことが明らかになった。2005 年からの本研究による発掘調査と研究成果で、この大型集落を営んだ社会は単に規模が大きかっただけでなく、高度に複雑化した社会であることが徐々に判明してきた。そのうち研究代表者が特に注目してきたのが、物資管理に用いられた印章・印影などのステイショナリーである。これらの存在から証明されるのは、当時の社会で物資の管理に封泥システムが働いていたことである。この封泥システムはのちの文字システムに直接連なるプロト文字システムと評

価できるものであり、歴史的にも極めて重要な意味を有している。テル・エル・ケルクからは 100 数十点にのぼる石製・骨製・土製の印章と、6 点の印章が押捺された未焼成の土の印影が出土しており、当時の社会では封泥システムは極めて一般的であった。それは、私たち日本人にとって日常生活の財産管理や物資の交換の証明に不可欠な印鑑とほぼ同様の意味を有していたのである。印章の分類と他の遺跡から出土している印章類との比較研究から、封泥システムからみるとケルクの社会には少なくとも 5 つ以上の物資管理グループが存在したと推定された。



ケルクに見られる主要な 4 つの印章押捺面のデザイン

封泥システムばかりでなく、ケルク新石器時代社会の複雑性を示す考古学的な証拠は他にも数多く指摘できる。例えば大量の石器素材の貯蔵から推定される農具などの生産の専門化や、特殊なドリルを用いたビーズ生産ワークショップの存在、トルコ石や紅玉髄、蛇紋岩といった遠隔地からの石材の盛んな搬入、大型の貯蔵倉庫の存在などである。物資の生産や長距離交易、そして物資管理が高度に発達していた社会を私たちは想定することができるだろう。

しかしながら、後述する墓地の調査などから推定できるように、当時の社会に顕著な貧富の差や性による格差は認められず、基本的には平等な社会であったと評価することができる。とすると、私たちが研究対象としているケルクの新石器時代社会は、集落が大規模で膨大な人口を抱えていたにもかかわらず、社会的な格差の少ない平等的な社会を営んでいたことになる。社会の複雑化のベクトルは、社会経済的な格差には向かっていない。そうした社会を運営していた基本的な原理の一つを示すのが、平等的な物資管理を示唆させる封泥システムの存在であり、また発掘中に数多くみられた様々な儀礼の痕跡であると考えられる。ケルク新石器時代社会に認められる儀礼には、地鎮祭・動物供犠・葬送儀礼・物送りなど様々であり、きわめて日常的に儀礼がおこなわれていた様子を私たち

は看取することができるのである。

(3) 新石器時代墓地の発見

テル・アイン・エル・ケルク中央区の発掘調査で、ルージュ IIc 期の居住区に隣接して、集落内の空き地に営まれた墓地を検出したことは、本研究で実施した調査の最大の驚きであると同時に、思いがけない成果であった。それは、西アジアで初めてとあってよい屋外型の本格的な墓地であり、西アジアのみならず人類の埋葬史を考えるうえでも貴重な発見となったからである。また墓地の下層からは火葬場と火葬人骨が出土し、単に被熱した焼人骨ではなく、明らかに意図的な火葬墓として現在まで判明している限り世界最古級の資料である。

この墓地は、面積 10m x 6m ほどの広がりの中に現在まで少なくとも 107 体の埋葬人骨が発見されている。(以下の図)



集落内の空き地であったこの一角が、当時の人々によって墓地として利用されていたことは明らかである。

この新石器時代の墓地には、一次葬墓が 39 体、一次葬墓であったと思われるが後の墓を造る際に攪乱されてしまった埋葬が 10 体、二次的に集骨、再葬された人骨が 36 体、火葬された人骨が少なくとも 22 体以上含まれている。後述するように火葬も再葬の一種と考えられるが、ここでは火葬人骨として別項

目に分類した。このほかに、ごく一部の部位のみが出土した幼児骨が数体出土しているが、埋葬数には算入していない。墓地内で埋葬どうしが一部重なり合い、上層では単体で土葬した一次葬と集骨された再葬が多く、下層になるにしたがって火葬人骨が多くなるとともに火葬用土坑も検出される。

墓地に埋葬されていた被葬者は成人がほぼ半数を占めるが、年代層は胎児から 50 歳前後の熟年成人までと多様であった。一次葬はすべて屈葬であり、埋葬姿勢は左右の側臥が多いものの、仰臥や伏臥も見られる。体軸や頭位方向などに強い規制は認められない。一次葬の半数以上に、装身具やスタンプ印章、石製容器、骨角器、動物骨などの副葬品が伴っている。再葬された人骨には成人男性がやや多いが、副葬品の伴う例は少ない。墓地全体として、一次葬の埋葬姿勢や副葬品、被火葬者などに顕著な男女差や年代差は認められなかった。この状況は、2007 年以前の調査で墓地以外の住居の床下や壁際などから出土した 47 体の埋葬人骨と大きく異なる。それらは一次葬とその攪乱、及び土器棺葬を含む若干の再葬であるが、被葬者はほとんどが乳幼児であった。葬法は墓地内の埋葬と共通するものの、副葬品が伴う例は少ない。したがって、乳幼児は主として住居など生活空間に簡素に埋葬され、墓地には成人を中心に男女を問わずすべての年代層の人々がほとんど格差なく埋葬されていた、とすることができる。

前述したようにこの新石器時代墓地の発見は予想外の成果であったが、西アジア最古の本格的な屋外型の共同墓地といえ、その発見と研究の意義は極めて大きい。現在、考古学的な研究とともに、出土人骨の形質学的研究および自然科学的研究が進行中であり、紀元前 6500 年ごろのケルクの人々の食性や、男女による食性の差異、婚姻関係などについての情報が得られつつある。火葬、再葬、一次葬という様々な葬法から得られる情報とともに、当時の人々の社会生活や精神生活について、たくさんのが解明できるものと、大きな期待をもって研究中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 15 件)

1. 常木 晃 「西アジアにおける墓地の成立」『日本西アジア考古学会第 13 回総会・大会要旨集』 日本西アジア考古学会

pp.70-75. 2008 年 (査読無)

2. Tsuneki, A. “Development of the clay sealing system in the Neolithic period in West Asia – from an archaeological study of Tell el-Kerkh”, 大沼勝彦編『文部省科学研究費補助金特定領域研究セム系部族社会の形成平成 18 年度研究報告』 pp.36–43. 2007 年 (査読無)
3. 常木 晃 「テル・エル・ケルク遺跡の調査からみた北西シリアの新石器時代編年」『西アジア考古学の編年－日本の考古学調査団からのアプローチ』 pp. 86–91、日本西アジア考古学会 2007 年 (査読無)
4. Tsuneki, A., Arimura, M., Maeda, O., Tanno, K., and Anezaki, T. “The early PPNB in the north Levant: A new perspective from Tell Ain el-Kerkh, northwest Syria”, *Paléorient* 32/1: 47-71, 2006 年 (査読有)
5. 常木 晃 「シリアの民族誌から見た土器生産の专业化」『世界の土器づくり』 (佐々木幹雄・斉藤正憲編) [同成社] 61～82 頁 2005 年 (査読無)

[学会発表] (計 16 件)

1. Tsuneki, A. “The archaeology of death in the Late Neolithic: a view from Tell el-Kerkh”, *Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia*, March 26, 2009, Leiden University, Leiden, Holland.
2. 常木 晃 「西アジアにおける墓地の成立」『日本西アジア考古学会第 13 回総会』 2008 年 6 月 15 日、慶應義塾大学
3. Tsuneki, A. “A newly discovered Neolithic cemetery at Tell el-Kerkh, northwest Syria”, *6th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, May 8, 2008, Sapienza Università di Roma, Rome, Italy
4. 常木 晃 「新石器時代の巨大集落－シリア、テル・エル・ケルク遺跡の 2007 年度調査－」『考古学が語る古代オリエント 2007』 2008 年 3 月 15 日、サンシャイン集会室
5. 常木 晃 「テル・エル・ケルク遺跡の調査からみた北西シリアの新石器時代編年」『日本西アジア考古学会第 12 回総会』 2007 年 6 月 10 日、天理大学
6. Tsuneki, A. “A Large and Complex Neolithic Settlement at Tell el-Kerkh, Syria” *5th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, April 4, 2006, Universidad Autónoma de Madrid, Madrid, Spain.

[図書] (計 3 件)

1. 岩崎卓也・常木 晃編 『現代の考古学
7 国家形成の考古学』 朝倉書店 2008
年 204 頁
2. Tsuneki,A. and Hydar,J. *A Decade of
Excavations at Tell el-Kerkh, 1997-2006,*
Department of Archaeology, University of
Tsukuba, 1-26, 2007

[その他]

ホームページ等

http://www.histanth.tsukuba.ac.jp/~tap/tap/tap_i/MAINj2.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

常木 晃 (TSUNEKI AKIRA)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：70192648

(2) 研究分担者

三宅 裕 (MIYAKE YUTAKA)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：60261749

中村 徹 (NAKAMURA TORU)

筑波大学・大学院生命環境科学研究科・教授

研究者番号：60015881

久田健一郎 (HISADA KENICHIRO)

筑波大学・大学院生命環境科学研究科・准教授

研究者番号：50156585